

パネル発表「地域と共に命の大切さを育む飼育活動」

池上久子

1 はじめに

本校は現在6学級192名の小規模校である。3年前より全校児童が携わる「ふれあい」を主体とした飼育活動に切り変えた。それは、教師のための動物飼育の研修会で聞いた獣医さんの、

「学校で飼う動物の意義は、子どもたちに命の大切さを学ばせることである。それには動物と直接触れ合う機会を作ってあげることだ。」との一言を聞いたことから始まった。更に少ない動物を大切に飼う、という助言をいただき現在、ヤギ2頭、ウサギ3羽、チャボ3羽、ウコッケイ3羽の、合計2頭9羽の動物たちを飼育している。



2 具体的な飼育活動

飼育委員会は、朝のエサやり・水替え、中休みの各学年のふれあい活動の補助、放課後のエサやりと、ふれあい広場から小屋に動物を入れる仕事などを主な活動としている。

各学年は中休みに、小屋の掃除とふれあい広場に出した動物たちとのふれあいを楽しんでいる。給食室からいただいた野菜を手から直接あげたり、膝にバスタオルを敷いてウサギやチャボなどを抱いたり、ブラッシングなどをしてかわいがり中休みのふれあい広場は賑わっている。

各学年のふれあいの日は次の通りである。

	月	火	水	木	金
学年	5年	4年	3年	6年	1、2年

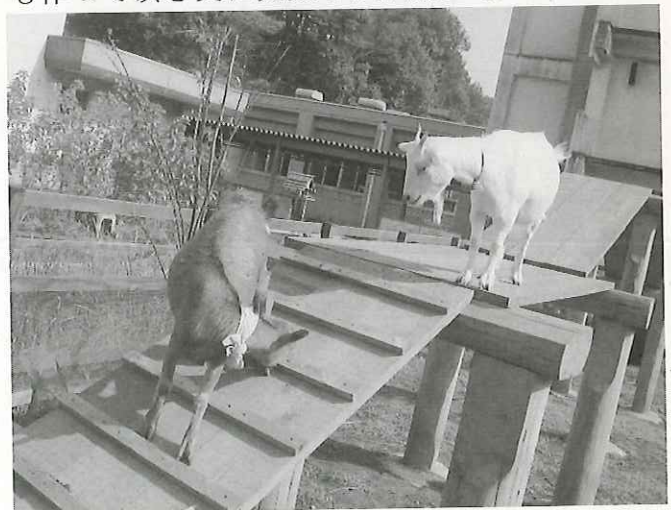
小屋の掃除やふれあいは、飼育委員会の児童が低学年に教えながら一緒に行うので、動物とのふれあいだけではなく子ども同士のふれあいが随所に見られ縦のつながりも深まった。また、日常的に動物と触れ合うことで動物の温かさと共に弱い物への慈しみの心も生まれてきている。優しく接することで動物も人間を信頼し、寄ってくるようになった。

3 地域・保護者の協力

3年前の夏、保護者・地域の協力により（20周年記念事業の一つ）校舎の中庭に20メートル四方の小牧場「ふれあい広場」が完成した。それまで小屋の前の小さな庭で遊んでいた動物達が、一気に広い場所で自由に遊べるようになった。

昨年2月、環境教育についてのシンポジウムを開催した折、休日の飼育活動の問題が話題になった。パネラーとして出席していただいた獣医さんより適切な指導助言をいただいたおかげで地域の方が立ち上がってくれた。本年1月には、「ふれあい広場推進委員会」として会則も設け、休日の世話についてより組織的に運営していただけるようになった。

更に、地域の方の材木提供により、すべて手作りの飼育舎が完成し、動物を小屋から直接「ふれあい広場」に出すことができるようになった。また、高い場所の好きなヤギのために「ヤギ橋」も作って頂き更に充実した広場になってきた。



4 動物の死（命の尊さ）

夏休み後半、学校のシンボリック的存在であったヤギのバニラが老齢と熱中症のため倒れた。その日から3日間は教職員と地域の方々との協力で付きっきりの看護が始まった。獣医さんの懸命な治療と子どもたちの励ましに危篤状態を脱したバニラは18日間生き延び9月半ばに亡くなった。最後まで懸命に生きようとした姿を子どもたちは間近に見、命の尊さを実感として味わうこととなった。

また、地域の方々と協力して看護に当たったことで更に絆が深まり、毎月第2日曜日の「ふれあい活動」には、それまで以上の人々が参加するようになった。

更に、暑さのために倒れたことを市に訴え、一度は断念していた飼育小屋の電気工事の許可を受け、照明器具とコンセントが取り付けられた。これにより今期の冬から動物専用のヒーターが入り万全の寒さ対策ができるようになった。今後は換気扇等、暑さ対策をしていく予定である。



5 獣医師会との連携

動物のケガや病気については、すぐに対応していただき助かっている。特に昨年夏、10才になるヤギが倒れた時には昼夜を問わず往診し最良の治療をしていただいた。また、動物の健康診断や小屋作り・エサの与え方など、小さなことでも気軽に相談することができ飼育担当者として安心して飼育活動の推進ができています。

(町田市立大戸小学校教諭)

